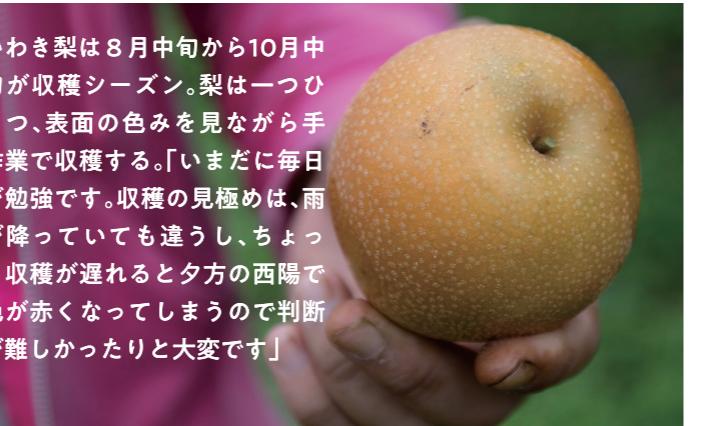


地域の生産者が協力し合い、いわきの梨を広めていきたい。

福島県いわき市
福島さくら農業協同組合
いわき梨部会GAP研究会
FGAP認証取得
日本なし



『いわき梨部会GAP研究会』は、2018年に内郷・好間・平窪・赤井・高萩・小川の6支部で構成される福島さくら農業協同組合のいわき梨部会内に発足。沼倉果樹園・沼倉克美さんは、そのメンバーの一人。脱サラして、お父さんの営んでいた梨園を引き継いで早7年。「会社員時代は農業にあまり興味はなかったんですが、退職を機に次の仕事のことを考えた際、明治時代から続く実家の梨園のことを思い出したんです。私で4代目で、幸水・豊水・新高を中心に栽培しています。うれしいことに多くのお客様から“美味しい”と言ってもらっています」。



いわき梨は8月中旬から10月中旬が収穫シーズン。梨は一つひとつ、表面の色みを見ながら手作業で収穫する。「いまだに毎日が勉強です。収穫の見極めは、雨が降っていても違うし、ちょっと収穫が遅れると夕方の西陽で色が赤くなってしまうので判断が難しかったりと大変です」

「果樹の農地継承ができるところを増やして、研修生を受け入れるなど、今までの農業の壁を壊していきたい」と話す、福島さくら農業協同組合の園部さん

沼倉果樹園では、現在、約100アールの畑で700本もの梨の木を栽培している。「うちではジョイント栽培など新しい栽培方法も積極的に取り入れているんです。枝をつなげて栽培することで、実の品質が一定になり、何より収穫作業が楽になります。農作業ってなにかと身体への負担も大きいので、少しでも快適に進められるのはうれしいですね」と沼倉さんは、「前梨部会会長の草野さんは根気がいる作業なので、どれだけ楽に作業できるかは重要です」と沼倉さんは、栽培方法や農業の考え方を教わったのだそう。





見えってきたという芳賀さんは「沼倉さんのような梨農家になれるよう、これから経験を積んでいきたいです」と思いを熱くする。

「元々梨は大好きで、地元いわきで農業をやるなら梨がいいな、と思つていました。県の紹介で沼倉さんに繋いでいただき、今いろいろ実践しながら勉強させてもらっているところです」。沼倉さんの農園には、こうした新規就農を目指す若者も研修に来ている。

芳賀さんは「梨の作業は力仕事もあるけれど、それだけじゃなく、すごく繊細な果物が相手の仕事だとおも知りました。丁寧に扱わないと、傷がついたり、すぐにダメになってしまふ」と話す。コロナ前は中国やアメリカなど外国人からの人もよく買いに来ていたという沼倉さんの梨。「研修していると買ってくれる人や、食べて喜んでくれる人の姿を近くで感じることができます。まだ始めたばかりですが、1年を通してやることがたくさんあるので、これら意欲を持って学んでいきたいです」。実際に農家さんの中に入つてチャレンジすることで、自分がやりたい目標もより明確に

「会社員と違って農業は、自由度が高いので自分に合っていると思っています。でもコストはかかるし、天候にも左右されるので読めない部分も多いです。自由な反面、サボれば自分に確実に返ってくるので手は抜けないし。だから毎日が自分との戦いなんです」と沼倉さん。真面目で温厚な人柄が垣間見れる。現在はお母さんや手伝ってくれるスタッフさんたちと和気あいあいと農作業に取り組んでいる。「ここ



沼倉さんの道具たち

梨農家の沼倉さんが愛用している仕事道具を紹介します。



ハサミ 3種



電動ハサミ



輪っか



1. 収穫した梨はコンテナで作業場まで運び、みんなで選別作業をする。2. 農協出荷用の梨はスタッフが集荷に来てくれる。3. 集められた梨は『JA福島さくらいわき梨共同選果場』へ持ち込まれ、ベルトコンベアに乗せられながらセンサーなどで選果、箱詰めされていく。機械を使って1日に1,000~2,000コンテナの梨を処理しているのだそう。4. 今年の梨の出来を確認している園部さん。5. いわき産の梨は瑞々しくジューシー。品種ごとに若干味が違うので、食べ比べもオススメ。6. いわきの美しい海岸は豊かな地域の象徴。近くを訪れた際は、是非立ち寄りたい。

「梨など果樹栽培は初期投資も多く大変ですが、でもとにかく人がいないと活気が出ないと思ってます」と農協の園部さん。「新規就農やリターンの人たちが働きやすい環境を作ることで、部会員を増やしていきたい。そのためにも、受け身ではなく、農協側からも積極的にアクションしていく」と話す。手始めに、初心者でも管理のしやすい品種の導入を検討中だそう。「私たち事務局の役割は、生産者さんとの『ミニニケーション』を密にとって、県の農林事務所との橋渡しをすることです。農作業の環境を整え、どんどんチャレンジしていく場所にしていきたい」。

鉄鋼職人だった沼倉さんのお父さんが手作りしたという、サイズを確認する特製の輪っか。「選別の時に梨を通してみて、通り抜けちゃうのであれば規格外です。素早く判断できるので重宝しています」。ステンレス製で耐久性も考慮された作りになっている。試行錯誤した結果、現在の形になったのだと。また、大きすぎるものも規格外となるそう。

太い木の枝を切るのは実は重労働。今は電動のを取り入れて負担を軽減している。以前は手動のものをよく使っていましたが、たくさんの枝を切っていたら手が腱鞘炎になってしましました。電動ハサミを導入して、かなり救われました」と沼倉さん。冬の時期に、3ヶ月から4ヶ月ほど時間をかけて剪定作業を進めていく。